
孤独な愛の戦士 G 一夜天の風とBrillance G—

MUGEN KAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な愛の戦士 G 一夜天の風とBrilliance G一

【Nコード】

N3783W

【作者名】

MUGEN KAI

【あらすじ】

孤独な愛の戦士 仮面ライダーの名を継ぐもの

・・・名は”仮面ライダーG” またの名を”吾朗”。

闇の中で1人、人ならざる者の悲しみを背負い、愛のために戦っていた。

そんななか、彼は一人の少女と出会う。

名は”八神 はやて”。

心の奥底で家族を求める彼女の願いを知った吾朗は、はやてと共に生活することとなった。

そんな中、運命の日に、”それ”は目覚める。

・・・闇の書の覚醒、吾朗を狙う”シェード”の怪人達、彼を追う一人の魔法少女・・・。

”すべての愛を守る、孤独の戦士”は、その運命に勝つことができるのか？

そして、暗躍する”シェード”の目的とは？

さらに、裏に隠れる2人の影の正体とは？

寂しさは分け与えるもの（前書き）

MUGEN KAIです

このSSは

魔法少女リリカルなのはA、S × 仮面ライダーG
のクロスSSとなっています

Gの方は設定がなぞな部分も多く、独自解釈だったり追加要素がどうしても多くなっています

それでもいい！俺は仮面ライダーGが活躍するところが見たいんだ！
という私の同士や、それでもOKという方へ・・・

お楽しみいただければ幸いです・・・。

寂しさは分け与えるもの

「君にAcerbeな涙は似合わない。シャルマン
を見せてくれ。」

一人で泣いていた私に、にいにの第一声はそれであった。

今考えると、とてもおかしい。

普通の人がそんなこと言ってしまったら、きっと不似合いな挙句、赤面する結果となるだろう。

だが、にいにはそんな言葉が似合ってしまうのだ。

＊

きっかけは、にいにが翠屋の常連になったことから始まる。

「これほど1993のRomane Contiに合うチーズケーキは初めて食した！ありがとう、マスター！今度、恵理を連れて来る！」

母さんの話によると、これがにいの開口一番だった。
よほど強烈に印象に残ったらしい。

ただ単純に

「おいしい」

と言ってもらえることはよくある。だが

「これほどワインに合うケーキはほかにない！」

と大声で言われたらしいから。

その後発覚したことなのだが、いいには少し名の知れたソムリエで、事あるごとにワインのことを考えるワインに情熱をささげる男、悪く言えば、ワイン馬鹿であるらしい。

なお、これは後日にいにと一緒に来た恵理さんから持たされた情報だ。

恵理さんも、そのチーズケーキを食べて、美味しい、そして彼女も言ってくれた。

「これは確かに1993のRomaneに合う。」

2人のこの評価は功を奏し、後のチーズケーキの売り文句として人気商品のTOP3に食い込んだのはまた別の話。

それから2人は2週間に1回は来るようになった。

話によると少し離れたところにいいには住んでいるのだが、

「このデザートは赤ワインと合うものが多い。多少無理してでも来る価値があるから来ているだけ。」

と言ってくれている。

大層翠屋を気に入ってくれた様子だ。

それは恵理さんも同じで

「この紅茶を飲んでみると、料理に対するやる気と落ち着きを確認できるような気がするんです。」

と言ってくれていた。

恵理さんも、雑誌などで”美人若手シェフ”として特集が組まれるほど有名な人らしい。

実際、恵理さんが店に来た時、母さんと美由紀お姉ちゃんがすごく驚いてたし、まわりにいた男女のお客さんにざわつきが生まれていった。

さらには、パティシエであるお母さんと意気投合したらしく、時折熱く語り合っている姿が見受けられた。

そんななか、私は家で1人の時を過ごしていた。

事が重なり、それに苦勞していることは知っている。

だからこそ、私は家族の前で見栄を張ってしまったのである。

「私は1人で大丈夫。お仕事がんばってね。」

心からそう思ってるはずなどない。

当時の歳の女の子としては、私は”年相応に甘えたい”という気持ちはある。

だが、毎日夜遅くに帰ってきて、ため息を吐く母さんの姿を見ると、そんなことなど言えない、という芽生えるには早すぎる自制心が、つい本音を押えてしまうのだ。

だが、いざ1人で家にいると、やはり、何とも言えない寂しさがこみ上げてしまう。

それがあふれ出してくる時、それは涙と嗚咽となり、私の顔をぐしゃぐしゃにしていた。

このまま見捨てられるのではないのだろうか？

とそれは勝手な被害妄想へとつながっていき、そのたびに自分自身に表現しがたい感情がこみ上げてくる。

おそらく、にいにが来てくれなかったら、ずっとそのままの気持ち

で、自分に嫌悪を覚えながら生きてきたのだろうか？

その答えは永遠に分からない。

なぜかというならば、その未来は実現されなかったのだから。

にいの、あの一言で・・・。

「君にAアセルブc e r b eな涙は似合わない。Cシャルマンh a r m a n tな笑顔を
見せてくれ。僕は、その悲しみをEアンヴロツペn v e l o p p ?な気持ちで
抱擁しよう。」

にいには少し不器用なところがあった。

だからこそ、あんな遠回しに自分の気持ちを伝えたのだろう。

でも、お世辞はなしで、その言葉は似合っていた。

その時のにいの表情と、あの笑顔で、私はやっと甘えられるようになった。

甘えることに罪は無い、罪なのは、なんでも1人で背負いこもうとするわがままである、と。

その後、私は母さんに進言、わがままを言った。

「私にも、できるだけの仕事させてほしい。」と。

それを聞いた母さんは少し困った表情をした。

母さんは良くも悪くも優しい。

客観的にみると、少々親馬鹿レベルまでかもしれない。

母さんは、できるだけ小さいうちは静かに過ごして、大きくなったら考えてほしい、という気持ちがあった。

だが、そんな私の背中を後押ししてくれたのは、他でもないにいであった。

「たまに」でいいですから。子供の気持ちにできるだけ答えるのも親の役目だと思います。まあ、自分はまだ子供を持ったことはないですが……。」

「たまに」という部分で、ある程度私は納得できなかった。だとしたらほとんどの時間はまた1人で過ごさなければいけない。なる。

そんなことはもううんざりであった。

少しの一緒の時間が与えられれば、その分多く、それ以外の時間で寂しさを感じてしまうからだ。

だが、なにも考えがなくなにには提案はしていなかった。

「なのはちゃんが1人にいるときは、僕と恵理と一緒に過ごそう。幸い、恵理は同じ海鳴市に住んでるし、短い時間だけど、1日中退屈していることはないと思う。……ううん、それはさせない。それが、僕と恵理の総意。」

その言葉とともに、恵理さんも笑顔でうなずいた。

「私……もう、1人じゃないの？」

「そうだよ。僕と恵理に思いっきり甘えろといひさ。言っただろ？
アンザロツペ
”Envelop?” な気持ちで抱擁しよう” ってね。」

その言葉を聞いた瞬間、私の気持ちはそれまでの人生で一番温かい心地となった。

もう1人じゃない。

暗い部屋の中で、もう1人で泣かなくてもいい。
四六時中、もうじつとしなくてもいい。
もう、誰かに甘えてもいい……。

＊

「母さん！4番チーズケーキと紅茶！よろしくね！」

「りょーかい！」

その後、私は翠屋皿洗いとして全力全開で働いています。

他の人が聞いたら変かもしれないけど、この場にいることが、私の最初のわがまま。

それを現実に変えてくれた人は今……。

「やあなのはちゃん、がんばってるね！」

「あっ！にいにだ！今日もいつもの奴？」

「そうだね……今日は紅茶じゃなくてコーヒーにしようかな？」

「ふふっ、ブレンドはお任せでいいかしら？」

「はい。」

私はそれからその人のことをいにというようになった。

私にとっては、恭也お兄ちゃんと同じくらい大事なもう一人のお兄ちゃんだとおもっている。

けれど、お兄ちゃんって呼んだら紛らわしいので、にいと呼んでいた。

にいには私の家に遊びに来たり、翠屋に来たりを続けていた。ほとんどは恵理さんがよく来てくれるのだが、にいには休みも少なく、住んでる場所も離れてるからたまに来る、というペースだ。だけど、ほとんどの休みに翠屋に来てくれることを知っているので、文句など言わない。

むしろ感謝を言うべきである。

「美由紀ちゃんも、仕事がんばってるね。」

「そりゃあ、なのはには負けられませんから。」

「なのはちゃんも誰に似たのか働き者ですからねえ。あっ！思い出した。桃子さん、この前、1975の貴腐ワイン”シャトー・ドウ・コニサー” が手に入ったんですよ！」

「貴腐ワインかあ。興味はあったんですけど、1975ってなにか貴重なんですか？」

「ええ。今有名である酒造メーカーのサントリーが初めて貴腐ワインを扱うようになった年のワインなんですよ。ですから、ある意味貴腐ワインとしては節目の年のワインですし、30年以上前の貴腐ワインですからね。飲んだ時は感激するでしょう。」

「あらあら。それじゃあ士郎さんにも連絡しないとね。」

父さんは少し前まで、とある事故でつらい生活をしていたのですが、それも完全に復活して今は仕事、なんでも、大切な人を守るボディガードをしています。ですが、ある程度仕事の方で踏ん切りがつ

いたら、ボディーガードはやめて翠屋の手伝いをするそうです。その知らせに、私は喜びを覚えていました。

なにせ、一緒の時間が少なかった父さんと、一緒の時間が増えるのですから。

そして、なぜワインの話題で盛り上げているかというところ、にいが時々ワインを持ち出して、父さん、母さん、にいとメンバーと、たまに恵理さんも交じってワインを飲み合っているからなんです。

しかも、にいが持ってくるワイン、話によると結構高価なものが多いか。

最初は母さんたちも遠慮していましたが、にいが

「自分は好きでやってますから。それに、パティシエから色々意見とか聞きたいので、それのお礼と取っていただければ……。」と押し切り、現在にいたります。

……ちなみに、今回の「1975の貴腐ワイン」シャトー・ドウ・コニサー」、1本5万円もするとか。

やっぱり大人の世界は大人じゃないとわかりません。

……でも、大人になったら、にいと一緒にワイン、飲みたいな。

*

今日は週に一度の定休日です。

開いたばかりの頃はこれからのことも考えて定休日なしで運行していたのですが、翠屋を開いてからある程度余裕が出てきたので今シーズンから水曜日が定休日となりました。

おかげで家族みんなでいる時間が増えて、私は嬉しい限りです。

今日も、いつものように楽しい日になるはずでした。

プルルルルル・・・

そんな我が家に一本の電話が舞い込んできたのです。
それが悲報になることを知らずに・・・。

「はい。高町です。・・・あら久しぶりです。・・・？いいえ。・・・え？それってどういうこと・・・。・・・そんな・・・みんなには？・・・そうか、わかった。」

電話が終わったかと思うと、血色を悪くした母さんが、電話を終え、リビングに戻ってきた。

その様子は、かなり異常であることは、誰が見ても分かった。

「母さん・・・どうしたの？」

私は何か嫌な予感がし、率直に母さんに尋ねる。

「・・・さっきね、恵理さんから電話が来てね・・・。・・・。・・・。」

「・・・え？」

その瞬間、なにか世界が暗くなったような気がした。

外の天気曇ったわけではない。

これは・・・気持ちの曇りだ。

にいにが・・・。・・・行方不明？

＊

話によると、恵理さんが電話をかけても3日前から電話に出なくな

り、音信不通状態が続いたらしい。

にいの交友関係の人たちに聞いても、にいの働いてるレストランに聞いても、にいには知らないという返事しか返ってこなかった。何かの病気で倒れていることを心配した恵理さんは、にいのマンションの住んでいる部屋に、合い鍵を使って入り、中を確認すると、なんと部屋が乱雑に荒らされていたのだ。

「まさか・・・誘拐？・・・殺されちゃ・・・った？」

最悪の可能性を考えた恵理さんは警察へと電話を行い、早速部屋の状況を調べてもらった。

すると、警察はある不自然な点に気づいたのだ。

「・・・個人情報書かれているものが・・・一つもない？」

そう、にいの個人情報書かれているもの、パスポートや保険証、免許証に通帳、さらには郵便物までなかったのだ。

あるのはきれいい好きであることがうかがえる新品に近い家具や道具、ただそれだけだったのだ。

そして警察は一つの結論、といってもあくまで仮定の結論を打ち出す。

「状況から考えて、”例の”連続誘拐事件”ですか。」

始まりは2年前。

ほぼ同時多発的に、人が音信不通で行方をくらます、という事件が起こったのだ。

それも、すべて同じように、その人物の部屋から一切の個人情報関係のものが盗み出された。

そう、まるでその人物を消したいのではなく、その人物の”存在”を消したいかのように。

それからも一定ペースで同じケースの誘拐事件は起こり、警察は同一の犯人だと予想。

さらに、規模の大きさから、組織がらみの犯行だと推測。

今もその誘拐事件を警察は追っているのだが、手掛かりは全く掴めず、捜査は困窮、しかも被害者一同は1人も発見されておらず、ネット内では

”現代の神隠し”

として伝えられている。

「・・・そんな。」

恵理は絶望を覚えていた。

個人情報処理することを考えて、刑事は

「おそらく殺されてはいないと思います。絶対にこの行動には大きな裏があるでしょうから。」

と説明はしてくれた。

殺されてはいない、が、ににはどこかへと連れ去られてしまった。しかも、その事件の被害者は今のところ1人も発見されていない。

つまり、もう2度と会えない、という可能性が生まれてしまったのだ。

『・・・結婚しよう。料理とワインが最高の marriage^{マリファージュ}であるように、君と僕も・・・きつと。』

姿を消す前の、最後の会話。

あの時、恵理は結婚の契りを交わしたのだ。

最高の幸せ、最高の日々が、これから始まるはずだったのに・・・。

「こんなのって・・・ないよお。」

彼女の悲痛な叫びが、曇り空の中を通り過ぎて行った。

戦士に宿るは仮面の系譜

「なのはあく！ビデオメールが来てるよ。フェイト・テストロッサだって！」

「あっ、はい！ありがとうございます、お姉ちゃん！」

私、高町　なのは！海鳴市に住む小学生、高町家の一番のお手伝いさん、高町家の末っ子で・・・

全力全開で頑張っている、魔法少女です！

小学校の帰り、森で出会った一匹のフェレット・・・ううん、友達のユーノ君。

その出会いから、私は今、机に置かれているレイジング・ハートとも出会って、何より”魔法”を知った。

一つの宝石・・・ロストログア、”ジュエルシード”。

その存在で、私は町を飛び回り、そして、あの子に出会った・・・。

フェイトちゃん・・・フェイト・テストロッサ。

最初はぶつかってばかりで、つらい経験や、苦しいときもあって・・・。

そして、その先にはフェイトちゃんにはつらい現実が待っていた・・・。

これが、”P・T事件”、またの名を”ジュエルシード事件”の結末・・・。

けれど、そこから始まったんだ……。私達、フェイトちゃんと私が一緒に歩むことが……。

私の髪を縛っている黒いリボンを見ると不意と思い出す。少しだけ長いお別れ、その直前に交わし合った再会の約束……。

そして今も、ビデオメールを交換し合って、こうやってお互いの顔を見合って……。

時々写る、ユーノ君とアルフさん、次元の船”アースラ”のメンバー、クロノ君、リンディさん、エイミィさん一同。

「早く会いたいな。」

そんな願いを口ずさむと、不意と机の上にある一枚の写真立てを見ってしまう。

3年前の小さい私、お母さんやお父さんたち、そして、私のそばにいてくれた、にいに……。

忘れたくない、けれど、これ以上待つのは……苦しすぎるよ……。

＊

連続誘拐事件、それ自体は解決に至っていない。

だが、ここにきて解決の可能性は生まれてきた。

それを説明するには、まずある組織についての詳細と結末を話す必要がある。

世界では、今でもテロが頻発に起こってしまっている。自分よがりな要求、それは命を散らせることしかできなかった。

その事態を対処するため、日本政府は一大決心をする。ならば、対テロ組織を作るしかない、と。

こうして、日本政府創設の対テロ組織、“シェード”。各方面の精鋭たちを集めて作られた“シェード”は、政府が予想していた以上の成果をあげ、その知名度と期待度は瞬く間にウナギ登りしていった。

・・・だが、その成果には、大きく、暗い”裏”があった。

人間の“洗脳”と、体を人為的に作り変える”人体改造”を行っていたのだ。

人間を生きた兵器、感情の無い無機質な者へと変える、外道行為である。

人道から大きく外れた行為は許されることは無く、“シェード”は解体、創始者である徳川 清山や大きく関係してきた関係者一同は逮捕、拳句にはその責任を負い、当時の内閣は解体、首相も政界から去り、日本に住む人たちに大きな衝撃を与えた。

・・・そして、この組織が、例の”連続誘拐事件”の犯人なのではないかという疑惑が浮上している。

犯行の規模から組織であることは掴んでいたし、もしその”人体改造”の実験台として”誘拐”を行っていたのだとしたら、これまでの現場証拠とつじつまが合うからだ。

個人情報の末梢、つまりその人たちの”存在していた記憶”を消したかったのは、人体改造を施した後、完全なる”他人”としたかったのではないだろうか？

そうすれば、いくらかの不都合は解消できる。

だが、あくまで推測とまりで、事実の段階にはまだ押し上げられないのだ。

原因が、決定的な証拠がないことと・・・

いまだに、誘拐された被害者が見つからないことにある。

そう、いくら組織の関係施設やルートを洗っても、手掛かり一つ見つからないのだ。

一気に解決へと運ぶかと思われた先の、大きな壁。

一向に捜査は進行しないまま、3年、過ぎてしまった。

＊

そういえば、恵理さん、今日テレビに出るんだっけ？

なにも”ワインと料理特集”という名目のコーナーのゲストだとか。時間的にもそろそろなのかな？

多分、このビデオレター見た後でも間に合うよね？

「なのはっ!!」

「!どうしたの？お姉ちゃん。」

私がDVDプレーヤーでビデオレターを再生しようとした時であった。

血相を変えたお姉ちゃんが、階段を駆け上がり、私の名を呼びながら部屋へと入る。

様子としては大層動揺、焦りを感じる。

その様子をみると、不意にあの電話に出た後の母さんを思い出してしまう。

あの後、しばらく沈んだままになったっけ……。

今はある程度踏ん切りがついたように見えるが、内心まだ陰りがあるのだと思う。

「今すぐ下に来て！大変なことになってる！」

＊

私は言われたまま下のリビングへと向ったのだが、リビングだけ、まるで別空間のようだった。

父さんと母さんがテレビの画面を凝視しながら、まるですべてが信じられないような表情をしている。

ただならぬことではない。

それは容易に察せた。

その原因はテレビにあることを理解した私は、同じようにテレビに注目する。

テレビの画面の右上に”緊急速報”とテロップがあった。

『今日午前11時30分ごろ、テレビ朝日の本社ビルがテロに遭い、以前人質200人と武装集団が立てこもっている状況です。その武装集団は以前に解体された組織”シェード”の名を名乗っており、以降要求を求める姿勢で……。』

……ひどい。そして非常で、異常である。

これが、私のはじめに抱いた気持ち。

元来対テロ組織であった”シェード”が一転テロ集団と化し、挙句に人質を盾に要求しようとしてもしかたしているのだ。

残酷である、そして矛盾の塊である。

だが、事が起こっている場所から離れている。

非情だが、悪く言えば私達家族にはなにかしらも関係はない。

おそらくこの事件が今の状況の原因だと思われるのだが、いまいちその理由がつかめない。

・・・だが、後に私はそれを知らない方が賢明であったと知ってしまふ。

『・・・そして、こちらが先ほど放送された”シェード”の犯行声明です。』

その言葉とともに、映像はとあるスタジオへと切り替わる。

「・・・・・・・・へ？」

写ったのは、一人の男性の顔。

だが、私はその顔を鮮明に覚えている。

3年前から変わらない、その顔立ち、小さい頃でしか会っていないのに、その顔ははつきりと。

黒髪でウェーブがかかっていて、顔立ちは凛々しいという感想が持てる。

何より、あの人の笑顔は、他の誰よりも、母さんと同じくらい、優しい。

でも、今の表情は、言葉の通り、感情のかけらすら感じない、冷たい無表情。

まるでナイフのような雰囲気、とても顔と声以外は同じ人物だと思えない。

・・・だとしたら、別人？

ううん、別人じゃなきゃダメ。

じゃないと、ずっと待ってた私は、どうすればいいの？

そこにいるのは、”シェード”の人なんだよね？

そこにいちやダメ・・・ダメだよ！

「・・・にいに？」

『・・・日本政府に告ぐ。貴様らが不当に逮捕した、”シェード”の創始者、徳川 清山と・・・ここにいる人質200人を交換する。』

お願い！もうこれ以上！！

『2時間だけ待つ。それ以後は、1分につき1人処刑し、それを生中継する。』

『・・・映像は以上です。なお、日本政府は徳川 清山の逮捕は正当なものである、と主張。警察は、要求を無視し人質救助のため特殊制圧チームを送ると決定し・・・』

・・・崩れてしまった。

私の、気持ちが・・・。

にには、そんなこと言わないのに。

どうして、そんなひどいこと・・・。

＊

『緊急ニュースです。只今本社ビル内から人質全員が自力で脱出。中の組織員は何者かに撃退されたようです。目撃者の証言で”赤い

仮面が特徴の怪人が撃退した”と証言しており、警察は現場検証とともに、その怪人を追っている模様です。・・・』

＊

「・・・これで俺もお尋ね者、か・・・。」

時は深夜。

高層ビルの屋上で、一人の男、吾朗が思考の海に沈んでいた。

「・・・それにしても、あの人たちはなんだったのだろうか。」

思い出すは、愛の戦士としての初の戦場となったあの戦い。

フィロキセラ・ワームの攻撃に膝をついたとき、銀色のオーロラから現れた、10人の仮面の戦士たち。

”仮面ライダー”

彼らはそう言っていた。

風貌はあの時の姿と似たような雰囲気があり、まるで親戚とでも言っているかのような・・・。

そして、彼らは”仮面ライダー”の名を、僕に与えてくれた。

その言葉を聞いた瞬間に感じた、あの安心感と決意。

「つまり、正義に戦う人のことを意味するのか？僕みたいな、孤独な戦士を・・・。」

その答えが見つかるのは、彼にとって随分と先になるのであった。

「見つけたぞ・・・仮面ライダー!」

不意に聞こえる、殺意漲る声。

その殺意は、確実に僕に向けられているものだ。

「・・・こんなに早く手先が来るとはな。・・・その殺意のA^{アロ}r?
me、僕は苦手かな?・・・村上、いや、コードネーム”c^{クラブ}rab
”。」

「久しぶりだな?5!どおしたあ?お前だって拳を血に濡らした同胞だったはずだがあ?」

・・・言っていることは真実。

確かに、俺の拳には、何十人かの人間の血が染み込んでいる。
だが・・・。

「・・・だからこそ、俺は悪と正義のm^{マリファージュ}arriage、すべての人の愛を守る戦士、仮面ライダーGとして生きることを決意した!」

「寝言ぬかしてんじゃねえ!貴様の体はもう人間じゃねえ!貴様の脳以外は人工物の鉄くずなんだよお!そんな体で正義の戦士だあ?そんな存在はなあ、殺して、殺して、殺しつくすのが生きがいだろおお!!うおおおおおー!!」

その決意を否定するように、村上は大きな咆哮をあげる。

次の瞬間、人間の姿であった村上の体が大きく変化、瞬く間に負の気を放った後、その姿はまがましいものへと変わるのであった。

”コードネーム”c^{クラブ}rab”、それは蟹を意味す。

村上は蟹を象った”クラブ・ワーム”へと変化し、そのたぎる、抑えきれない殺意を強く吾朗へ向けるのであった。

それを見た瞬間、心の中にある思考をいったん捨て、その決意を胸に、腰に巻いてあるベルト、ウィング型のコルクスクリューを模した”G オープナー”を確認、そしてベルトの横に付いている1973と書かれてあるワインボトルを模した変身するためのツール”ヴィンテージ”を持つ。

「今、僕のヴィンテージが芳醇の時を迎える・・・変身！」

それを持った吾朗は、その手と逆の方の手をを大きく一回りにまわし、体全体に力を入れる。

そして決意を表すかのように、ボトルを怪人に向け勢いよく示しだすと、ボトルをもう片方の手に持ち替え、G オープナーへとヴィンテージを差し込む。

するとオープナーのウィングが大きく開く。

それをもう一回元に戻すと、ヴィンテージからまばゆい赤のエネルギーが発せられる。

するとその身体が赤いエネルギーに包みこまれ、吾朗の姿が目視できなくなる。

そのエネルギーが晴れた瞬間、吾朗の姿が一変した。

胸に示すは赤いGの文字。

黒いスーツに、黄色い虫でいう複眼。そして触角らしきものもある。

そのまわりにも、Gの文字がかたどられており、耳の部分にはOの文字も見受けられる。

”GO”

まるで、吾朗の背中を後押しさせるかのような・・・。

ここに、孤独な愛の戦士、仮面ライダーGが現出した。

「ふんっ！これを受け取れ！」

すると、クラブ・ワームから何かが勢いよく投げ込まれる。

常人には見ることにさえ難しい早さだが、Gはそれをいともたやすく手に取った。

それは、今にも散りそうな青いバラ。

「青いバラ・・・裏切り者には、死を、か・・・。」

「その通りだ！総主から貴様は排除命令が下されたあ！この仕事と、あとは海鳴市へと向かって仕事をすれば、俺は一気に出世株だあ！」

「！？海鳴市だと！？」

「おや、まだ知らないみたいだな？冥土の土産だ！教えてやる・・・あそこ一帯のどこかしの地下に、日本政府が造った、最上級警戒レベルの凶悪犯が収容される”秘密地下拘置所”があるんだ！そこに我らが総主が待っておられる！」

「・・・なるほど、都市部から離れたところに作ることによって欺かせるか。」

「その通り！総主はできるだけ穏便に済ませと言っておられたが、そんなのめんどくさい！お前を始末した後、海鳴市を火の海へと変えて、総主をお迎えに上がるのだあ！！」

「！！なんだって！？・・・そんなことはさせないし、俺は始末などされん！！」

「ちょおこざいなあ！！」

クラブ・ワームがその強靱で巨大な腕、蟹のはさみをGに向けて振り下ろす。

その腕力は折り紙つきだ、だが改造を施され、強靱な肉体となったGにとってはそれは避けられない攻撃ではなかった。

「もうちょっとF？フェミニンmininな攻撃はどうだい？それじゃあ僕には当たらないっ・・・よ！！」

回避したGが怪人に向かって力強く連続のパンチとキックをするが・・・。

「！？堅い！」

そう、その装甲はパンチでびくともしないほどの堅さだったのだ。元は蟹。

その装甲の堅さは目を見張るものだある。

近接で長くいたら痛い一撃が来る。

それを察したGはいったん身を引き、距離を置いた。

「ふっ！この程度か！」

「くっ！」

言葉には悔しいが、確かに堅さには思わず舌を巻いてしまう。
だがそれきしのことと諦めるわけにはいかない。

Gは別の攻撃方法を考える。

「ライダーナイフ！」

Gの胸にある大きなGの文字が光り、そこから一本の大きな剣が出現する。

赤いGの文字が目立つ剣、柄はコルクスクリュー、剣部分と柄の逆方向の先にあるスクリューはソムリエナイフを模したものである。

「はああああ！！！」

Gはナイフの刃にエネルギーを込め、ワームに対し構える。

そして一気に加速をつけて怪人に切りかかるのだ。

その剣撃はかなりの威力なもので、その一振りで力のない下級怪人は爆散するほどである。

その斬は確かに怪人の胴体を切りつけたのだが・・・。

「なかなかの威力だが、まだ甘いわぁ！」

「なに！？ぐはぁ！！！」

その斬は確かに胴体を切りつけた。

だが、その斬は装甲に一本切り傷を入れただけで、直接ダメージへ

とつながらなかったのだ。

そして隙を見た怪人はその大きいはさみをGの胴体に叩き込み、Gの体を吹き飛ばす。

その威力は確かなもので、ダメージも結構なものだ。

「Gの力はそこまでのものだったというわけだあ！ふはははは！」

「・・・笑ってるがいいさ。だが膝はついても心は折れるわけにはいかない！この世界には・・・守りたいものがたくさんあるんだあ！」

「戯言をお！！？5！どうせ俺達改造人間は総主に従い、体を血に染め上げるしかないのだあ！！」

「俺は？5ではない！すべての人の愛を守る戦士！仮面ライダー・・・Gだ！」

明らかな怒りを込めている怪人がGに向かってはさみを振り上げながら接近する。

怪人の全力の一撃を叩き込むようだ。

だが、まだGの瞳に諦めの色は何えない。

むしろ、なにか希望の色に染められているのだ。

「トォウ！」

すると接近してくる怪人の上空へと一気にジャンプし、5メートルほどの高さまで上がると、そこから持っていたナイフを逆手に持ち、一気に怪人の元へと降下する。

「だからその剣は効かんと何回言えば！」

「だれが剣で攻撃するといったかな？」

「!ま、まさか!」

「このスクリユーが飾りだと思ったか!」

その言葉とともに、スクリユーを怪人の装甲へ突き刺し、エネルギーを込める。

そのエネルギーはらせん状に回転し、一気に怪人の装甲を音を立てて砕いて行く。

先ほどまで無敵とまで思えてきた装甲が一気に崩れる姿を見て、怪人は驚きと動揺を隠せない。

それを見たGはいったん怪人と距離をとり、高らかに宣言をする。

「今からがお前ら^{ジュ}”シェード”のBan^{バン・デ・}des^{ヴァンダー} vendang^{esだ!}」

そういうとGはGオープナーの栓抜きを模したスイッチを入れる。すると、ワインボトルを模したヴィンテージから、Gの赤いラインをたどり、Gへとパワーを注入する。そう、彼の必殺技を披露する時だ。

「スワリング・・・」

その言葉とともにGは体を一回転、右ひざをつき姿勢を安定させる。その間、怪人は装甲がはげたことに激しく動揺し、その場を動けずにいる。

絶好のチャンスである。

「ライダーキック!!」

エネルギーは足へと一点集中し、そのエネルギーを受け取ったことを確認したGは大きくジャンプをし、上空へと飛ぶ。

その後Gは体を高速で回転しながら、怪人へとび蹴りを図る。その足の先には、大きなエネルギー状の角錐が形をとっている。

体を高速回転させながら、とび蹴りでエネルギーを叩き込む。

”スワリング・ライダーキック”だ。

「ぐわああ!!」

その蹴りは怪人の装甲がはげた部分に思いっきりヒットし、怪人は痛みに悶えながらその身を吹き飛ばされる。

そしてここはビルの上。

怪人の体は屋上からまっさかさまに夜の街の中へと落ちていく。

チェックメイトの瞬間だった。

「裏切り者の？5！貴様に、正義の味方気どりができると思うな！その身体は、人を殺めることしかできないのだからなあ！！ふはははははは・・・」

その言葉を最後に、怪人は落下を待つことなく、夜の闇の空中で、Gの文字が浮かぶ中爆散した。

それを見届けたGは、Gオープナーからヴィンテージを外し、変身を解除する。

屋上の闇の中に、再び吾朗の姿が見えた。

「・・・確かにその通りかもしれない。だが、大きな力は人を守る

ことだってできるはずだ。それが・・・俺の、これからの生きる意味なのだから・・・。」

そのGの言葉には、大きな決意と、大きな悲しみが込められていた。

「・・・海鳴市、か。清山を解放するわけにはいかない。・・・また、行かなければいけないのか。・・・ごめん、惠理、・・・なのはちゃん達も・・・今は、俺は正面から会えない。」

孤独な愛の戦士 仮面ライダーG・・・

その背中では、どこへと向かうのか？

戦士に宿るは仮面の系譜（後書き）

剣（ライダーナイフ）

ベルト（Gオープナー）

変身時のワインボトル（ヴィンテージ）

と名前が決まりました。

出会うは運命の少女

「チーズケーキと紅茶です。」

「あっ、ありがとうございます。桃子さん……。」

「恵理さんも……昨日は大変だったでしょう……。」

ここは喫茶翠屋。

いつもならこの時間帯は客が増えていく時間帯であり、なのはと桃子、士郎や美由紀がせっせと働いているはずなのだが、今日は昨日が昨日であり休業日となっていた。

主に、先ほど警察の取り調べから”事件の被害者”として帰ってきた恵理から、あの時何があったのかを聞きたかったため。

そして、なのはが主に、高町家のコンディションを考えてからの判断である。

そして、今は客1人いない翠屋の空間で、高町家一同と恵理が、昨日のことについて話していた。

「……あの犯行声明の時まで、吾朗はおそらく洗脳されてたと思うんです。私を見ても反応がなかったし、吾朗はあんなこと言う人じゃないから……。」

「……やはり姿を消したのは”シェード”が関わっていたんだな。」

それを聞いて最初に反応したのは士郎である。

職業柄裏の部分の噂を聞くことは多い。

そして、実を言うと言裏の部分から、士郎は吾朗を探していたのである。

「にいにそんなことさせるなんて・・・。」

「でも、吾朗が私を持ってきたワインに興味を示したんです。私は最後の賭けとして吾朗に”飲んで”と頼みました。1993のRomanee Conti・・・吾朗の一番のお気に入りだから・・・。そして飲んだ瞬間・・・拘束されてた私を助けてくれたんです。」

「洗脳が・・・解けたってこと？」

それを聞いて桃子は思わず啞然とした。

だが、それと同時にになにか安心感も感じた。

それは高町家全員、そして恵理の総意。

まさかワインを飲んで洗脳が解けるなどそこかの喜劇的展開なのか
と思ってしまう。

相変わらずのワイン馬鹿の健在に、思わず笑みすら浮かべそうになる。

なのはは不意とある吾朗の言葉を思い出した。

『料理は人の数だけ存在する。それと同じくらいに、時が経つごとに、ワインも無尽蔵に存在するんだ。一つの料理に最高のmarriage^{マリヤージュ}のワインが存在できるように、世界の人と人も分かりあえる、そんな世界にできると思う。そんな願いを持って日々を過ごしたら、それは素敵なことなんじゃないかな?』

「（・・・そしていいにも、ワインで心がつながったんだね・・・）」

「その後”シェード”の組織員が襲ってきたんですけど、吾朗が私から守ってくれて・・・でも屋上まで来たときに、また組織員がきたんですけど・・・その人たち、なんか”化け物”に変わったんです。」

「・・・化け物？」

「ええ、なんか虫みたいな人型の怪物で、とっても気持ち悪かったです。・・・吾朗がその怪物に立ち向かってくれたんですけど・・・その怪物、銃も効かないんです。」

「・・・噂は本当だったのか。」

不意に士郎はある噂の話をした。

あくまで裏でまわっていた噂なのだが、時期は”シェード”の解体後の噂・・・。

”project G”と”人間超改造計画”・・・

内容としては、”project G”は人間の体をベースに、脳以外を機械化して、完璧超人を作りだし、無敵の兵集団を作りだそうとした計画。

”人間超改造計画”は一見内容としては似ているように思えるが、大きな相違点がある。

・・・それは人間の体を遺伝子レベルで作り変え、一種の生物兵器にしようとする計画であること。

この2つの計画により、”シェード”はまさに究極の軍隊を指し示したのだ。

この計画を”シェード”は裏で行っていた、という噂であった。表で判明した”シェード”が行っていたことは、人間の洗脳と、人間の体を強化し、従順なる強化兵士を作り上げようとしたことである。

更に行われていた外道行為、その噂を聞いた士郎は思わず悪寒が走ったという。

「・・・・・・・・・・」

言葉などない。

その外道さに、まさに閉口してしまう。

士郎も、

「そんな噂など噂のまままでよかったんだ……。」
と顔をしかめながらつぶやいていた。

「……吾郎は必死に対抗してくれたけど、その怪物にビルの屋上から投げ出されて、私もヘリで連れ去られてしまったんです……。」

「!じゃ。じゃあにいは!?!にいは無事なの!?!」

ビルの屋上から生身一つ投げ出されてしまったのだ。
普通は無事では済まされない。

なのははつい最悪の状況を予想してしまった。

「……そこから吾郎の姿”は”見てません。でもあの後、赤い仮

面の人が私を怪物から助けてくれたんです。」

「！そういえば新聞に載っていたわね。」

美由紀はなにか気づいたように飛び出し、リビングから今朝の新聞を持ち出した。

見出しには大きく、

「テレビ朝日ジャック 日本政府に堂々犯行声明！　組織の正体は”シェード”！？」

と一面でかかと特集されている。

その記事の中の、ある一文が注目された。

「人質を助けたのは赤い仮面をかぶった人物で、助けた後バイクで姿をくらまし、現在警察はその不審人物を追跡している模様。」

「・・・多分それだと思います。そして・・・多分、その赤い仮面の人、吾朗だと思うんです。」

「・・・それはなにか確証はあるか？」

冷静に事態を聞いていた土郎は、確認するように質問を繰り返す。それは、あるひとつの可能性を模索していたため。

・・・否定したい可能性を。

「確証はないです。・・・けれどあそこまで必死に私を助けてくれた。それにあの雰囲気、きっと吾朗だと思うんです。」

「・・・それはいいことだとは限らないぞ。」

「・・・え？」

士郎は顔をしかめながら、ある一つの可能性を提示する。
・・・あまりにも酷ではあるが。

「ビルの屋上から投げ出されたんだ。普通ただでは済まされない。どこかの病院に担ぎ込まれて警察に身柄を拘束されてたりするだろう。・・・だが、もしその仮面の人物が吾朗だったら、吾朗は怪我一つしてないから可能なんだ。つまり・・・吾朗が”普通の人間”じゃないことを考えたら、それは説明できてしまう。」

『！』

「・・・そういえば、怪物が言ってた。”シェードによって作られた体で、シェードに反旗を翻す気か”って・・・。」

そこから導き出される、一つの可能性・・・。

・・・吾朗は、もう普通の人間ではない。

＊

「・・・海鳴、か。本当に久しぶりだな。」

吾朗は、夕焼けの海鳴市の砂浜へと来ていた。

香る潮の風。

今日はちょうど6月1日、季節が季節のため砂浜には誰もいない。時折聞こえる波の引く音が、どうも表現できないむなしさを強調し

ていた。

・・・一人で戦うと決めた、悲しいながらも揺るがない決意。
しかし、吾朗の心の中では、ある不安が生まれていた。

「・・・恵理やなのはちゃんたちは、今の俺を、受け入れてくれる
のだろうか？」

人ならざる者となってしまう自分。

それは過ぎた力で、レントゲンでもとってみたら、もはや機械と
か思えないような惨状になっているのだろう。

もはや人を感じさせる要素など、この外見の姿と、この感情や心、
そして脳、それ以外なものもないのだ。

人ではない。

その存在は、この前戦った怪人達と、同じ存在なのではないか？

只人の心を取り戻しただけで、もう前の生活には戻れない。

やはり、永遠の孤独を背負うしかないのだろうか？

その答えは、吾朗一人で見つけ出すには、あまりにも重すぎる。

その時、不意に右方向からなにか物音が聞こえる。

「いったああ・・・。」

それは、一人の少女が、車いすから落ちる音であった。

足が不自由なのであろう、その動かない足を引きずりながら、な
にか落ちているものを取ろうとしている動作をしている。

吾朗は、それを見て放置するような非情な気持ちを持っている男で
はない。

ソムリエとして、お客様に声をかける。

その時の心得を思い出しながら、吾朗は少女にかけより、優しさを
込めた真心の笑顔で声をかけた。

「どうしましたか？お譲さま。」

「ふえっ！？お、お譲さま！？」

なにか動揺した様子でその少女は赤面している。

茶色の短髪で、黄色いヘアピンをしていて、肌はとても白い。

顔つきは、さしずめ美少女、というよりはかわいさを感じる風貌であつた。

「？どうされましたか？」

「あっ！えーと・・・そこに落ちてる、貝殻を拾おうと思ってな。ちよつとドジつてもうたあ。」

吾朗は少女が指をさす方向を見る。

そこには、夕焼けの光を幻想的に反射している、一枚の貝殻があつた。

あまり普段から注目しないが、確かに注目してみると思わず身惚れてしまうような輝きであつた。

「Entendu. 少々お待ちを。」

その純粋な気持ちを感じ取り、思わず笑みがこぼれた吾朗は、その貝殻の元へと向かい、それを拾い上げると、ただちに少女の元へと向かい、にこやかな笑顔でそれを手に持たせると、その横に倒れている車いすを元に戻し・・・

「ちよつと失礼。」

「え？・・・わわわわわわ！？」

少女の身を両手で優しく抱きあげ、その少女を車いすの元へと座らせる。

俗に言う”お姫様だっこ”である。

その行為から何を想像したのか、少女の顔はさらに紅潮し、今にもお湯を沸かせそうな様子である。

少しの時間が経ち、やっと冷静さを取り戻した少女が咳払いをし、言葉を発した。

「ありがとな。えーと、お名前は？」

「僕？・・・。」

吾朗、と名乗ろうとした瞬間、不意とある考えが浮かぶ。

もし、自分の名前を知っていることで、この少女に危害が及んだりしたら？

恐らく怪人は自分を血眼で捜しているであろう。

裏切り者を処刑するために。

もし、何かのきっかけで、この少女が自分の名前を出し、それが怪人の耳に入ってしまったら・・・。

そこから考えられる行動は、想像したくない。

追っては狂人、そして殺人をためらわない怪物だ。

最悪、この少女の命が・・・。

だとすると、この少女は、自分と関わりを持たない方がいい。

ここは別の名前を出すしかないだろう。

だがいきなり思いつくわけない・・・。

・・・そうだ、僕の信条。

” H a r m o n i e u x ”

ワインにおいての要素がバランスが取れ、調和できている状態。そうだ、こんなソムリエを目指してきたのではないか。

ここからなにか要素をとるとして、読みは”アルモニウ”。

”アル”というのも変で単純か・・・。

！ならそのままの読みでならどうだろう。

” H a r ”・・・”ハル”・・・これでいこう。

「・・・答えにくいやろか？」

返答が送らているため、拒否の意と取っているのか、少女は少々困った顔をしている。

そこまで時間が経ったか、と少しだけ自分を責める。

吾朗にとって、女性を泣かせることなど、御法度なのである。

「ごめんごめん。ハル・・・ハルだよ。」

「ハルさんかあ。いい名前やな。私は八神 はやてっていうねん。よろしゅうな。」

「はやて・・・か。いい名前じゃないか。」

「どうやろ？ちょっと男っぽい名前だと思うんやけど。」

はやては少々苦笑いを返す。

「いいや。疾風^{はやて}・・・葡萄畑に吹く風は、周囲に香りを運んで収穫時期を報せ、時にはさらなる深みの美味しさを作ってくれる。いい名前だ。」

「なんかハルさん、ロマンチストやわあ。ありがとな。」

名前をほめる、ということは今までなかったのであろっか、恥ずかしそうな顔をしながら、内心喜んでる様子であつた。

「そういえば、君の家は近くかな？時間的にそろそろ帰った方がいいと思うけど……。」

「そうやな。そろそろ夕食づくりにいかへんと……。」

「でも1人じゃ危ない。……家まで送って行こう。」

「いや、そこまでしてくれなくてもいいんよ。ここから20分だけやし……。」

「それでもダメだ。君はかわいいんだし、途中でなにがあるかわからない。それにさっきみたいにアクシデントがあるかもしれない。」

「かつ、かかかか、かわいい!？」

その言葉にかなり動揺したのか、非常に顔を紅潮させている。

吾朗は自覚はないが、吾朗の顔は世間一般で言われる美形というものである。

さきほどの行動、気遣い、そして言動を思い出しか、少女の頭はショートをすると言わんばかりの勢いである。

……だが、この言動や行動、さらには自分が美形だということ、吾朗はまったくの自覚なしであるのが、性質が悪い。

「?とにかく、家までは送らせてもらうよ。家までの道を教えてく

れ。」

「ふええ！？・・・あつ、その、まずあの信号まで向かってください。」

「Entendu.」

こうして、色々と思い錯綜しながら、吾朗とはやてはであった。

・・・これから、様々な運命が待っていることも知らず。

はやてはまだ知らない。

この男に課せられた使命と現実が、どれほど悲しいものなのかを。

願いはたったひとつだけ

はやてに道を案内をされながら車椅子を押すことしばらくは経ったか・・・。

吾朗、今はハル、そしてはやては、はやての家のすぐそばまで来ていた。

シンプルな赴きが感じられ、まさに立派な一軒家の象徴。

ところどころに見えるバリアフリーが、彼女の生活を物語っている。だが、家の中からは人の気配を感じない。

「（まだ親御さんは帰ってきてないのかな？）」

ふと吾朗は思った。

だが、この時間に子供1人置いておくのも不自然である。

両親とも共働きで忙しかったり、1人親で頑張っているとかなら仕方ないことなのだが・・・。

そう・・・いつかに出会った、あの少女のように。

「ありがとうございます。そ、その・・・ちょっとお礼がしたいので、よかったら上がってもらえませんか？」

「いいのかい？親御さんがダメっていうと思うけど・・・。」

経緯を話せば理解はしてくれるであろう。

だが、吾朗の本心はそこに問題があるのではない。

先ほども話したが、吾朗自身、彼女、八神 はやては、自分とは関わらない方がいいと思っているからだ。

そのために、わざわざ偽名まで考えたほどのだから。

だから、はやてのその気持ちは嬉しかったのだが、吾朗は、要が済んだあとはそそくさと帰ろうとしていた。

だが、はやてのある一言で、思わず”甘さ”がでてしまうのだ。

「わたしの親・・・今はいないんや。」

「！」

「だから、心配してくれなくてもいいんですよ？・・・ですから・・・。」

聞いてはいけないことを聞いてしまった。

今の吾朗の気持ちは、まさに自責の念で満たされている。

彼女はまだ年端もいかない少女。

よく考えてみれば、そもそも車椅子の少女を1人置いていく親なんてそうそういない。

どうしても無理ならば、どこかのヘルパーやりに頼んでいるはずだ。それなのに、砂浜という車椅子ではいささか行きにくい場所を1人でくることなんか、親がいればないことではないか。

なにより、はやての悲しげながらも、それを払拭させようという無理強い笑顔。

また・・・女性に・・・悲しい顔をさせてしまったな。

思い出してしまう、あの時の・・・思い人の顔。

その時には、自分には記憶はなかった。

だからこそ、あのような反応をするのは仕方のないこと。

だが、3年間ずっと待ってくれたあの思い人を、ある意味裏切ってしまったのだ。

・・・だからこそ、自分の戒めとして、あの悲しげな表情を胸に刻もう。

今は・・・まだ会うわけにはいかないのだから。

「・・・それじゃあ、ちよつとだけ。」

・・・今は休息の時間を噛みしめよう。

まだシェードの追手は、海鳴に來たことは知らないはず。

行動は早かったはずだからおそらく明後日頃から襲撃に来るはず。基本、こういったことに関しては、少々段取りが遅いが向こうだ。向こうにいた自分だからこそわかる。

・・・おそらく、これが最後の安らぎの時。

次の安らぎは・・・すべてが終わった時だ。

「そかそか！ほんなら、リビングでゆっくりしといてな。」

その言葉を聞いたはやての表情が嬉しさによる笑顔へと変わる。

・・・おそらく、一肌恋しいのであろうか？

あの足で、見る限り1人身だ。

学校には・・・おそらく、いつていないのであろう。休学扱いとして。

人が來た、というだけであの笑顔だ。

心の底から孤独からの脱出を求めている・・・。

・・・なのはちゃん。

今は友達にも囲まれて、家族もいて、俺のことは忘れている・・・のか？

いや、忘れなければいけないのだろう。

はやてちゃんは知らないらしいけど・・・俺は世間的には警察から追われる存在だ。

やはり・・・俺と人は関わっていけない。

その人のまわりに・・・災厄が起こってしまうのだから。

俺は・・・孤独の戦士として生きる。

そうだ・・・やはりそうでなければいけない。

・・・恵理・・・。

＊

『・・・それでは、フェイトちゃんとアルフさんが裁判に勝つてくれることを祈っています。またね!』

とある部屋の1人の少女。

金髪のきれいな長い髪に、かわいらしいピンクのリボン。

その顔つきは、あえて美人の顔つきと言っておこう。

その少女・・・フェイトは、DVDレコーダーの中から、さきほど見ていたビデオレターを取り出し、それをケースにしまう。

それとタイミングがぴったりに、また1人の女性・・・アルフが入る。

オーラとしては頼れるお姉さんチックで、時折見える八重歯と、オレンジの長い髪から見える犬の耳、そして長いしっぽが特徴的だ。なのはの世界の常人がみたらびっくりすることであろう。

そう、”使い魔”の存在を知らなければ。

「あっ、アルフ。お疲れ様。」

「さすがにちょっと堅苦しい場は疲れるねえ。」

そう言いながら、肩を揉んで疲れているアピールをする。

それと同時に、犬耳がびよこびよこと、しっぽが小さく動いている。

「あっちの様子はとうだった？元氣そうだったかい？」

アルフが訪ねていること、それはビデオレターで見る限りの様子はとうだったか、というものであった。

アルフにとって、なのはは、ご主人さまであるフェイトを助けてくれた恩人、としての認識を持っている。

少なからず、かなりの好感は持っており、時折、あちらの様子はとうだろうか、という内容のつぶやきが見受けられていた。

「うん、裁判、がんばってね、って言うってくれてたよ。あと・・・うん、一応、元氣そうだった。」

「一応元氣そう？」

元氣であることをやんわりと遠回りに否定した言葉。

様子がすぐれなかったのであろうか？

それを心配しているのか、少々表情に陰りが見える。

「・・・なんか、ちょっと無理してる感じだったんだ。なにか・・・悩んでる、って感じかな？」

「悩んでる、かあ。」

なのははフェイトと同じで、基本1人で背負い込む性格だ。

思いや悩み、悲しみを。

だとすれば、おそらくフェイトを心配させまいと無理をしていたのだと思われる。

アルフは、最終的にそう考えていた。

「できれば悩みを聞いてあげたいところだけど・・・今は会えないし・・・。そういう時は、静かに見守ってればいいんじゃないかな？」

「見守る？」

「そう。フェイトは今直接会えないし、目の前には片付けなきゃ問題もある。とにかく、ちゃっちゃとこっちの問題を片付けて、少しでもこっちの心配を減らせばいいんじゃない？あとは、再会したら、思いっきりぶつかればいい。ぶつからないと、きっとあの子は話してくれないだろうからね。」

「・・・そうだね。私も、そうだったから。」

そしてあの子に救われたんだ。

ぶつかれたから、なのはとも友達になった。

お互いに名前を呼べた。

だったら、こっちもぶつかるんだ。

・・・分かり合うために。

おたがいに、悩みは少しでも共有できるはずだから。

「そうだね。それじゃあ、次の初公判、がんばろうか。」

「うん！それでこそ私のご主人さまさ！」

とにかく今は、できることをするだけだ。

＊

八神家に招待され、吾朗は紅茶とクッキーがふるまわれていた。

紅茶もクッキーのまあまあのおいしさで、気がつけば30分はゆっくりしていたか。

だが、紅茶を飲んでいると、不意にある記憶がフィードバックされた。

それは、喫茶翠屋のチーズケーキと紅茶。

なのはちゃんがせっせと働いていて、桃子さんが笑顔でお菓子を作り、美由紀ちゃんが長女としてしっかりと・・・といっても料理面ではちょっと苦い経験をしたらしいから、主にカウンスターとかで働いていて、時々、桃子さんと士郎さんと3人でワインを飲んで・・・そうそう、桃子さんと僕で、”ワインと料理論争”が展開されるときもあったつけ。

だが、今はもう3年前の話。

・・・思い出すのはやめよう。

・・・つらくなってしまう。

その間、随分と長く話をしていたと思う。

きっかけは、はやてちゃんが、

「ハルさんのこと、色々聞かせてえな。」

と言われたことから始まる。

自分がソムリエだということ、今までの思い出や、名前は伏せてで高町家での思い出も話したし、そして、彼女であった惠理との思いでも少々。

ちよっとワインの話もしたかな。

はやてちゃんは終始きよんとしていたけど、楽しそうに話している様子を見て、笑顔でいてくれた。

「ハルさん？どうしたん？」

「・・・ああ、気にしないでくれ。」

・・・つい考え込んでしまったな。
・・・さすがにゆっくりしすぎたか。

時計はとくに夕食の時間を示しており、外も暗くなっていた。
季節として、どちらからと言えば暑いという気温が、窓をあけると伝わってきた。

「紅茶とクッキー、ごちそうさま。そろそろいくよ。」

「・・・もういつてまうん？」

はやての悲しげな顔について一瞬迷ってしまうが、ここに長居をするわけにはいかない。

僕は、孤独を貫くことを決めてしまったのだから。

「ハルさん、急ぎの用事とかあるん？」

「・・・いや、特にはないが。」

「なら、せめてや、夕食、一緒に食べてもらえへんやろうか？」

「・・・はやてちゃん、僕は、ここに長居しちゃいけないんだ。」

僕は、世間一般のただの犯罪者、テロ組織の一員として、一番顔が知れている。

今、この家にいることが知らされたら、はやてちゃんに迷惑がかかる。

そんなことは、女性に迷惑をかけてしまうのは、僕の信条に反する。

「それって・・・やっぱり、この前のテレビ朝日のジャックに關係

あるん？」

「!・・・知って・・・いたのかい？」

「うん・・・ちょうどテレビ見てたから。」

「・・・じゃあ、なんで通報しなかったんだい？」

危険人物だということは知っているはずだ。

もしかしたらはやてちゃんを人質にとって、また事件を起こすかもしれない存在なのに・・・。

「・・・気づいたのは帰る途中やったんやけど・・・優しかったからや。」

「・・・優しかった？」

「そうや。ここまで世話焼きで、優しい人が、そんなひどいことするわけあらへん、って思ったからや。それに、テレビで見たときと随分と雰囲気違ったし・・・。理由としては・・・だめやろか？」

・・・この子は純真すぎる。

純粹に優しくて、純粹に家族を求めている。

それは、僕がまだ洗脳状態であつたら、確実に命を落としているであらう。

この子は、人とふれあえなかったせいで、”疑う”ということ覚えていない。

・・・いや、それはとっても幸せなことかもしれない。

「・・・その気持ちは嬉しいよ。ありがとう。こんな身分になって、

こんなことを言われるとは思ってなかったよ。」

「やっぱり、あんなことをしなくちゃいけない理由でもあったんやろ？でも、私は信じる。ハルさんが、本当は優しい心を持ってるって。・・・そして、失礼かもしれへんけど・・・私は、ハルさんをかくまいたいんや。」

「・・・あんなこととした理由は確かに否定はしないけど・・・正気かい？」

それは、はやてちゃんへの迷惑どころじゃない話になる。

それはやりすぎだ。

もう、この言葉をもらっただけで十分なんだ。

「本気や。このまま外に出たら、ハルさんはいろんな人に追い回されちゃうやろ？それだけはいやや。本当はしたくないことされて、挙句に捕まるなんて、本当はとっても優しい人なのに・・・。おそらく、ハルさんには行くあてもあらへんと思ったし、それにな・・・私、家族が・・・ほしいねん。」

「・・・はやてちゃん。」

その涙目の姿が、不意と、あの子の影と重なる。

一人はいやだと願う少女が、またこの場にいる。

・・・自分は、はやてちゃんに迷惑をかけるかもしれない。

だけれど、僕が去れば、また、はやてちゃんは、孤独で苦しい生活へと戻ることになる。

それを、僕といることで、少しでも楽にすることができるかもしれない。

・・・孤独・・・。

・・・孤独になるのは・・・自分だけでいいんだ。
こんな歳の少女が、孤独に震えてちゃいけないんだ。
・・・あの時のように、救える気持ちがあるなら。
今の僕でも、救えるのだったら・・・。

「・・・覚悟は・・・あるのかい？」

「・・・だったらこんなこといわへん。」

・・・僕は、孤独の戦士、愛の戦士として、はやてちゃんを、孤独から守ろう・・・。
そして、命に代えてでも、はやてちゃんを守り抜こう・・・。
僕が・・・後悔しないように。

「Entendu・・・わかった。」

「・・・よろしくな！ハルさん！」

それじゃあ、まず夕食の準備を手伝おうかな？

彼女を知ること

とある大きな一軒家のキッチン。

今の時は一般的に言われる朝、それも太陽が昇って間もない早朝である。

ここで、1人の男、吾朗が世間一般に言われる朝食を調理していた。

「後は、塩をひとつまみ全体に振りかけるんだったっけかな？」

少々自信なさげなトーンで、ボウルに盛られた多量の生野菜に、塩をひとつまみし、全体に振りかけ、フォークで軽く塩と野菜をなじませる。

彼が今調理しているのは、シンプルな生野菜のサラダだ。

それと同時に進行で調理をしているのか、コンロによって加熱されている鍋から、コンソメの香りが香る。

おそらく、洋風のコンソメスープを作っているのだろう。

「・・・うん、大丈夫だね。」

かき混ぜたサラダを味見し、濃すぎないことを確認すると、サラダが盛られたボウルを持ち、食事を行うテーブルへと向かう。

そして、朝食をとにもする彼女の席のそばへと置き、再びキッチンへと向かう。

少し迷うような素振りを見せると、彼はおもむろに冷蔵庫の中身を確認し、頭をひねる。

買い出ししてから、日がたっているのか、冷蔵庫の中身はあまり充実しているとは言えない状況であった。

吾朗は少しの時間を置いた後、冷凍庫の隅に置いてあったカチカチ

の鮭と、冷蔵庫からはバターを取り出し、凍った鮭を電子レンジに投入、ボタンをプッシュし、解凍を待つ。

彼が作ろうとしているのは、鮭のムニエルだ。

彼は、昔シェフである、彼女の恵理から教授してもらった洋風の料理のレシピを思い出しながら調理を行っていたのだが、何分昔のことである。

覚えている料理のレパートリーも少なく、冷蔵庫の中身で思いついたおかずとしては、それぐらいしかできなかった。

その証拠に、サラダもコンソメスープも、どうしても同居人であるはやての作った夕食と比べ、簡素なものとなってしまうている、と吾朗は感じていた。

「レシピの本でも、買った方がいいかな？けど、生活費ははやてちゃんが負担してくれてるんだから、あまり我が侘も言えないな。」

おそらく今日にも買い物へ行くだろう。

話によると、今日は病院への定期検診もあるらしい。

ついでと言っては何だが、担当の先生にも挨拶をするつもりだ。

「・・・とにかく、はやてちゃんが起きる前に終わらせないと・・・」

そうして、吾朗はコンロの火をとめ、鍋を持ち、スープをよそう準備をしていた。

＊

カーテンの隙間から漏れだす光がまぶしい。

今まで寝ていたならなおさらだ。

時は朝。

光の度合いから見て、太陽も準備万端といったところか。

朝によく聞くが、どんな鳥かわからない鳥の鳴き声が聞こえる。

その鳴き声はよく聞くが、普通の人にとっては、調べるほどでもないであろう。

「・・・おはようさんや。」

少しの寝ぐせが目立つ茶色の髪を気にしながら、はやてはそばに置いてある時計を見る。

時計の短針は、7と8の間の部分にまわっている。

いつも通り、といったところであろうか。

ベッドのそばに、自分の体のことを考え、ベッドの上で着替えられるように配置させてある服のボックスに手をかけ、静かに開く。

そこから、少し服を選定し、そこからロングスカートと、薄く、通気性のある、長袖の白い服を取り出す。

そしていつものように着替えようとした時、ふと昨日のことを振り返る。

あの後、吾朗と夕食をともにし、空いている部屋を振り分けし、そこを吾朗の部屋とした。

その後、少々の我が侘を言って、

「お風呂に入るの、手伝ってくれへんかな？」

といったのだが、吾朗はそれにやんわりと拒否の意を示したり、

「一緒に寝てくれへん？」

と挙句には就寝の同行まで頼んだのだが、それに関しても諭されたりと・・・。

こうして、吾朗は八神ファミリーの一員となったわけなのだが・・・。

「・・・なんで、あそこまで必死になったんやろ、私。」

吾朗をこの家への住居や、さきほどの我が俣。

どうも、特に住居への説得については、あんなに必死に説得したことなく、今までなかった。

家族は欲しい、それは今まで秘めてきた願いであることは確かだ。だが、あそこまで懇願すること、それも、吾朗本人が渋ることになっても、自分にとっては久しぶりのことで、そんな疑問など吹き飛ばすほど喜びを感じていた。

なにせ、孤独の空間であった、この無駄にだだっ広い一軒家に、新しい家族がいるのだから。

着替え終わると、ベッドの上にあった体を、そばに待機させてある車椅子のそばへと寄せ、車椅子へと慎重に乗り込む。

そして、部屋を出て、今日の朝食はどうしようかと思っていた矢先に、不意に、コンソメスープと、バターの香りが鼻についた。

＊

「吾朗さん、おはよう。」

「あつ、おはよう、はやてちゃん。ちょうどよかった。」

そういう吾朗の右手には、ジュウジュウと、焼きたての音を鳴らしている鮭のムニエルが盛られている皿、さらには、テーブルの上にはサラダとコンソメスープ、そして1枚のトーストの皿と2枚のトーストの皿がある。

吾朗が作ったことは明白であろう。

「朝食、作ってくれたん？」

「ああ。さすがに、女性1人に家事を任せるとするのは、自分の信条に反するからね。」

「その・・・ありがとさんや！」

はやては、顔を少し赤くし、両手を組んでくねらせながらも、面と向かってお礼を述べた。

8歳の少女にはもちろんのことだと思われるが、血縁者でない男性に料理をふるまわれたことなど、今までない。

その行為に対して、果たしてそのような印象を持っているのかは分からないが、食事の終始に至って、彼女はその料理の美味しさに舌鼓しながら、顔を赤くしたままだったという。

＊

僕は今、はやてちゃんの車椅子を押しながら、病院の定期検診へと向かっている。

外の風景について話しながらも、時々慣れない眼鏡がずり落ちそうになるたび、クイっと上げる。

自分の顔は、悪い方向で世に知れ渡っているため、変装として黒ぶちの眼鏡と帽子をかぶっている。

そんな中、僕は思考の海に潜っていた。

まず、僕の為すべきこと、それは、はやてちゃんを怪人の魔の手から守りながら、ここ、海鳴市に来るはずであろう”シェード”を殲滅し、徳川 清山の脱走を未然に防ぐこと。

ここに怪人が来ることは分かっているし、”シェード”の基本方針として、戦力はある程度小出しにしている傾向にあることも分かっ

ている。

複数の怪人が来るとしても、下級怪人が複数と上級怪人1体の編成小隊。

なぜ小出しにしかできないかというと、シェードは今、予備の秘密裏に建造された、小型の培養所で、怪人を作っており、怪人の製造設備が、小隊を作るほどの規模しかないからだ。

あちらの様子を見ると、清山の脱走の早期化を目指しているので、小隊をため込むことはしない。

しかし、それはありがたいことだ。

小隊レベルであつたら、まだ自分1人で対処ができるからだ。

僕が対処をしていれば、はやてちゃんに危害が及ぶ可能性は低い。ない、とは言いきれないが、今はポジティブシンキングで行こう。だが、警戒は怠らない。

怪人が、いつ来てもおかしくない状況であるからだ。

幸い、自分には身体能力がある程度ある。

はやてちゃんの前で変身しなくとも、せめて逃亡はできる。

・・・実を言うならば、はやてちゃんの前では、変身を行いたくない。

おそらく、自分が異形の者だと知れば、はやてちゃんを怖がらせて、悲しませてしまう。

そんな時の顔を見るのは、とても辛いから・・・。

・・・話しこんでいる間に、どうやら病院には到着したらしい。規模が大きい。

・・・やはり、はやてちゃんの足は、それほどの重い症状なのだろうか・・・。

「?どうしたんや?ハルさん。」

どうやら、不安な顔をさせてしまったようだ。
どうも、考え込んでしまうのは癖かな？

「なんでもないさ。今日の昼食をどうしようか考えていた。」

「そかそか。それじゃあ、今日は外食ですまそか。」

「そうだね。」

＊

今、はやてちゃんは診察を受けている。

話によると、はやてちゃんの足がマヒしている原因は、今でも分からないらしく、今はとにかく治療に重なる治療によって努力をしているらしい。

しかし、幼少時からマヒは改善されず、現在に至る。

・・・僕は、98%の改造によって生まれた改造人間だ。

様々な状況に対応するため、僕には、人間には無い能力を持っている。

その1つとして、僕の目は、サーモグラフィ機能や、人の簡易的なレントゲンを見ることができる機能が付属されている。

レントゲンと聞き、便利に思うかもしれないが、あくまで簡易的なもの。

完璧なものではないが、マヒが原因不明と聞き、早速その機能を使ってみた。

このときばかりは、この体に、少しは感謝を覚えたが。

見たところ、僕にももちろん原因はわからない。

だが、命の危険は今のところは、見たところはなさそうだ。

実際、はやてちゃんの担当医師である石田さんも、命の危険はないといっているそうだし、まずは安心だろう。

とにかく、切実に、はやてちゃんには、地を足で踏んでほしい。そうすれば、僕がいなくなっても、彼女はたくましく生きれると思うから……。

「八神 ハルさん。どうぞこちらへ。」

ドアから石田さんの顔が出てくると同時に、車椅子に乗ったはやてちゃんが出てくる。

はやてちゃんからは、外国から帰ってきた親戚で、日本に帰ってきた時に、はやてちゃんのお父さんの友人から、同居を頼まれた、ということで通してもらっている。

話によると、そのご友人さんは、はやてちゃんへ無利息で援助を行っているとか。

友情とはうるわしいものだ、と、改めて感じた一場面であった。

「それでは、初めまして。はやてちゃんの担当医師の、石田 幸恵です。」

「八神 ハルです。以後お見知りおきを。」

石田さんのイメージとしては、真剣にはやてちゃんを考えてくれる”オーラ”と言ったらしいのだろうか。

思いやりもあって、ひたむきである印象を受けた。

その後、ちょっとした質問をされた。

どこの外国に行っていたのか、だとか、はやてちゃんと生活してでの印象、あと、はやてちゃんと生活するにあたって、そんな気持ちでいるか、など。

その話の内容を聞くに、やはりひたむきにはやてちゃんのことを考

えてくれているのであろう。

この先生は、どうやら信用に値する人物のようだ。そんなことを考えている中、ふと、石田さんが話の話題を変える。

「・・・まず、あなたには感謝しています。」

「感謝、ですか？」

「ええ。何分、はやてちゃんの場合、症状が症状の上に、あの年で1人身、親のぬくもりを覚えずに育ってしまいました。ですが、今日のはやてちゃんの表情、いつもより明るいうえに、楽しそうに”家に新しい家族が来た”って話っていて・・・。あなたも、話を聞く限り、信用できる人物ですし・・・。はやてちゃんのこと、よろしくお願いします。」

「・・・いえ、こちらこそ。こちらも、できるだけバックアップしていきたいと思います。」

その後も、石田さんと、少し長い時間談笑してしまい、はやてちゃんに声をかけられるまで時間を見てなかったことに、ついびっくりしてしまった。

・・・そういえば、まともに人と対話をしたことなど、久しぶりのことなのかと、気付かされてしまうのであった。

＊

病院を離れ、昼食をファミレスで済ました後、はやてちゃんとスーパーへとショッピング。

今はちょうど、その買い物を済まし、スーパーの入り口にいるところだ。

しかし、今、自分の頭の中は、2つのことについていっぱいになっていた。

1つは、明後日が、はやてちゃんの誕生日であること。

「（プレゼントはしたいが、所持金がないのも事実なんだよな・・・弱った。）」

ここ最近まで、テロ組織のただの人形だったのだ。

行方不明扱いとなっているため、口座も凍結されているだろうし、借りていたマンションも、誰か別の人が住んでいて、所持物もないはずだ。

ここはケーキでも1つ、と言いたところだが、ちょっと厳しい現実が阻んでいる。

それでもう1つ、それは・・・。

「（・・・やはり、まだ尾行しているな。）」

「はやてちゃん、ちょっと用事があるから、先に帰っててくれるかな？」

「？ええけど・・・夕ご飯の時までは帰ってきてな。」

「もちろん。」

そうして、はやてちゃんと僕は別行動となる。

僕は、商店街の中を適当に進んでいくが、その尾行者もそれにそってついてきている。

「（やはり目的は僕・・・後ろをとるか。）」

そうして、僕は細い裏路地へと入り込む。

それに同調し、尾行者も裏路地へと、慎重にさしかかる。

だが、このときから後ろを取られることは確定した。

僕は、裏路地の中で、姿が見つからないうちに、3階建ての建物の屋上へと、一気に駆け上り、屋上へと到着する。

さらに、間髪いれず、屋上から、尾行者の背後へと、一気に飛び出す。

普通、こんなアクションなど、人間は不可能に近いが、幸い僕は人間じゃない。

その身体能力は、使えるときは使うと決めた。

そして、今がそれを使う時だ。

「ふっ！」

そうして、懷に忍ばせてあった拳銃を右手に持つ。

・・・昔の自分なら、拳銃を人に向けることなど絶対にしなかったのだが、人という物は、体が変わると、心まで変わるものなのだろうか？

だとしたら、前より強い決意が宿った、と思いたい。

そして、尾行者の正体は、青髪の、一般的に言われる、好青年の顔つきであった。

しかし、身だけで信用はしない。

この男の正体が、怪人かもしれないからだ。

＊

「フリーズ。」

！・・・後ろを取られた。

しかも、この背中に押し付けられている物体・・・拳銃か。おかしい、攪乱魔法を使って、気配は消したはずだ。

調査対象である、八神 はやて宅に居候した男。

名は”吾朗”。

見る限り、魔力反応もなく、ただの優男にしか見えなかったのだ、そこまで警戒はしていなかったのだが・・・。

攪乱魔法を見破り、なおかつ一瞬で背後を取った。

もしや、この男は手慣れかもしれない。

「なぜ俺の跡をつけた。そちらの目的と身分によっては・・・。」

意思表示するかのごとく、拳銃をさらに強く背中に突き立てる。

・・・ここは、話術で切り抜けるしかないか・・・。

「いやー、すみません、てっきり、あなたの顔が知り合いに似ているもので、声をかけようとしていたんですよ。」

「だったら、僕達がスーパーに入った2時間前からついてきたはずなのに、なぜその間声をかけようと思わなかったのですか？」

しかも、最初から尾行に気づいていたと来た。

やはり、この男、ただの居候だと思わないほうがいいらしい。

・・・ならば、ここは強行突破で逃げるべき、なんだが・・・。

ここで魔法を使ったら、人の目についてしまう。

まあ、どちらにしろ、魔法関係は私は苦手だから、やっぱり格闘で切り抜けるのが一番かな？

この調査対象には悪いけど、ちょっと眠っててね？

「セイツ！」

「おっと。」

「!」

・・・私の拳が、やすやすを受け止められた？
しかも、なにこれ、握力が半端ない。

おかげで、私の拳は、男に握られたままだ。

この男、なにか格闘技でもかじっているのだろうか？

・・・これは、本気で行かないとダメか・・・。

「ハア!!」

私はめいっぱいのハイキックを首筋へと叩きもうとする。
しかし・・・。

「やっとしっぽを出してくれたかな？」

「!!」

これも、腕で受け止められた。

私、いや、私達は使い魔と言われる魔法生物。

身体能力や五感は人を超えるものがあり、私は格闘戦術を得意としている。

弟子も何人かいるし、実力も、多少自信はある。

さっきのハイキックもかなりの確信があっただが・・・。

「（なんで人間が私の全力を、しかも余裕そうに耐えてる!?!）」

正直、動揺した。

魔力の類もなく、特別鍛えられてもなさそうなのだが、私の判断ミスだった。

ここは、ノックアウトじゃなくて、本気で逃亡を考えないと……。そうして、私は突き立てられている拳銃を叩き落とし、ある人物へと念話を送る。

『アリア！今すぐ転移魔法の準備！』

『！なにかあったの！？』

『今は話してる暇がない！今屋上に上って逃げたけど……。って追いついてきた！？』

私が3階建ての建物の屋上へと駆け上り、念話をしていた時、なんと、その男も同じように、屋上へと駆け上ってきたのだ。正直、本当に人間か疑われてくる。

『ロツテ！準備完了したよ！』

『さすがアリア！』

その念話が終わった瞬間、私の足元に、魔法陣が展開される。この魔力光の色から見て、確実にアリアのものだ。ここまでくれば、ひとまずは安心だろう。

魔法陣に警戒をしているのか、あの男も近づいてこない。

「待て！」

「今は待ちませんが……。近いうちに、また会うこととなるでしょう。」

魔力の波動から見て、そろそろ覚醒の頃合いらしい。
おそらく、今週中にでも、守護騎士が現れるであろう。

「・・・最後に質問だ。お前は・・・シェードの追手か？」

シェード、聞き慣れない言葉だ。

そこかの組織名なのだろうか？

とにかく、この質問には答えても良さそうだ。

・・・シェード・・・調べてみる必要があるそうだな。

「いや、シェードという名前すら知らん。」

「・・・そうか。・・・いいか、あまりはやてちゃんに接近するな。

・・・容赦しないぞ。」

「・・・肝に銘じておこう。」

今はまだ動く時ではないからな。

そうして、魔法陣からまばゆい光が発せられ、私はアリアの元へと
転移された。

・・・だが、ひとつだけ気になることがあった。

・・・なぜ、あの男からは、人間の臭いがしなかったんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3783w/>

孤独な愛の戦士 G 一夜天の風とBrillance G-

2011年9月16日05時26分発行